

力定得往生。

三者廻向発願心言廻向発願心者過去及以今生身口意業  
所修世出世根及隨喜他一切凡聖身口意業所修世善根以  
此自他所修善根悉皆真深信心中廻向願生彼國故名廻向  
發願心。

と善導は説いている。

以上述べたように三心と云うのは聖道門諸師が説いて  
後に善導、法然の両祖で確立したのである。次に中国淨  
土教に於ては曇鸞、道叡、善導、日本淨土教では法然等  
が三心を修して往生すると云うことをどのように理解し  
ているかを説明する。曇鸞にては三不三信の説、作願及  
び廻向を往生の要とみとめられた。道綽にては曇鸞を継  
承して如来の繪相、又は別相を觀縁憶念しつつ稱名する  
と云うことである。三心は前述したように觀經にその源  
泉を持ち、善導によつて深い宗教体験を基底として釈さ  
れ法然は念仏者には必ずしもたねばならぬと云う宗教意  
識である、この宗教意識こそ法然の三心觀は「法語消息  
に示されている。しかしいづれの文にも善導釈が用いら  
れているが、その解釈法は相異なる所でないといつても

過言ではない。ただ凡夫が淨土往生を願うには自己の罪  
惡生死の凡夫であることを自覺して同時に偉大なる仏の  
願力によつて仏の名を称えて心を真実心にして仏の願力  
に乗じて往生を得ることを確信して、三心を具足するこ  
とであることが往生できる最大の条件であつたのである  
これによつて三心の重要性が強調されてくる。

## 選 択 集 の 研 究

### 一 第三章を中心として

永 田 容 靖

逸択集は著述の少い法然上人にとつて、上人の思想研  
究の資料として最も確実な、又最も重要な述作である。

本集述作の動機については、末尾の句に今不<sup>ルニカ</sup>圖<sup>ル</sup>蒙<sup>ル</sup>仰  
辭<sup>ルニシ</sup>謝<sup>ル</sup>無<sup>ク</sup>地<sup>ニ</sup>仍<sup>シ</sup>今<sup>ニ</sup>慈<sup>ニ</sup>集<sup>ル</sup>念<sup>ス</sup>仏<sup>ヲ</sup>要<sup>ス</sup>文<sup>ヲ</sup>判<sup>ス</sup>述<sup>ス</sup>念<sup>ス</sup>仏<sup>ヲ</sup>要<sup>ス</sup>とあ  
つて、名前は記していないが、諸伝によると兼実公の依  
願で出来たものと云う事が出来る。そして本集述作の原

意は、法然上人の奉ずる善導直伝の念仏の教えが、当時の南部北嶺の仏教に対して如何なる地位を占めるかを示さんとする原意を述べられたものである。

法然上人の教義の特色は、偏依善導を標榜する如く、徹頭徹尾觀念主義を排斥して一向専修、選択本願の念仏を主張した点にある。本集は彼の専修念仏の立場を明らかにし、かつ聖道諸宗に対する教理的批判を展開し、聖道門の救いからはずされた所の在家下層民を弥陀の救いの正座に据え大胆に、かつ明確に他力本願の道を示した点において、本集は浄土宗の立教開宗の宣言書と云われており、又日本仏教史上画期的な意義をもっているものと云える。以上の如く本集は法然教學を組織的に論じたものである。

選択本願念仏集、この題号は正しく本集の根本義を表わしている。鎮西が徹選択集に「言選択是然師所立之選択念仏也」と云つており、又法然上人自身の御言葉として浄土宗要集に

故上人云諸師作文本意有一慧心立因明直辨之義善導釈本願念仏一義予立選択一義造選

### 択集也

と云つている如く、選択という二字に重点を置いて浄土教の高揚に努められたのは、法然上人において他にないであろう。そしてこの選択について、本集の中で三重選択を立てられた。即ち第一種には聖道門を捨てて浄土門を取り、第二種には雜行を捨てて正行を取り、第三種には助業を捨てて称名正定業を取ると云うものであつて、要するに一代仏教中に於いて唯本願の称名一業のみを選択し、他の一切の教行を廃捨せられたのである。そして法然上人は正定業の念仏には、必ず三心が具足されねばならないとしている。即ち本集第八章念仏行者必可具足三心之文の私釈に

私云所引三心者、是行者至要也。所以者如何。経則云、具三心者、必生彼国。明知三心、必得生。釈則云、若少三心、即不得生。明知一少、是更不可。因茲欲生極樂之人、全可具足三心也。

と云つておる如く三心具足の念仏を示されている。

要するに選択集は、まず仏教の教理体系の中において占めるべき法然上人自身の立場―専修念仏―を明らかに

し、これを浄土門とし、それ以外の仏教を聖道門として区別し、自力成仏の聖道門を難行、また他力往生の浄土門を易行に定位したのである。そして念仏以外の一切の行業を難行として廢捨し、選択本願の称名念仏を正定業としたのであるが、法然上人においてはこれを弥陀自身の選択として受取られ、そしてこの念仏を選択した弥陀の救いが主として聖道門たり見放なされていた在家下屬庶民層に向けられた点を指摘し、当然の事として天台、真言、法相等の聖道門と訣別して浄土門に帰入することが、強くすすめられたのである。

法然上人にとつては、仏教の全ての行法の中より、特に念仏の一行が選ばれたのは弥陀の慈悲の深さによるものであつて、「選択とは即ち是れ取捨の義なり」と云われておる如く、この取捨が、無量寿経に説く様に、四十八願の中の第十八願において既に成就されたとの確信に基づいている。

要するに法然上人の専修念仏は、諸行の中から念仏の一行のみを選び取り、余行を捨てて称名のみを往生浄土の行業としたものであり、これによつて一般庶民の誰も

に仏教的な生活を開放したのである。  
註

- 1 徹選択本願念仏梁（浄全七・八二二）
- 2 浄土宗要集（浄全一〇・二六二）

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。